

津田文庫
文庫 1
1888



水戸南陽原先生著

千里必究

岩州

全

此書は岩州南陽原先生乃ふるくかめを承けりて交りて後
くを傳へりて一層其の心を盡すに其の心を盡すに
かきつる所の心よりかりたりとていひて其の心を盡すに
ゆるしめしむる人の心もせん文化八年の春松本より
ちやうのたぬ

東都

精共堂梓

早稲田大学
図書館蔵書

をたしめしむる世は其れをわすれず
あひなまきいぬるあひをたれむふ
不虞よ悔へ急よ持りのふる乃とに
しそとて後をいふおれりし
水戸南陽原先生著
家よむつむく常事寒温をいひ
いふ冊子を納めしめしむる
乃まら子あるもの並業をいふか

七
海に帰る
うまうめ
しん

文化八年
未結
二月梅半

装束序

行軍之際不可無藥

書矣故明季兵書或

有方立醫藥一門如

紀序

我邦山鹿氏勇備集亦
取一溪先生雲陣砲法
以倣其體例然以予觀
之皆似不便于用焉

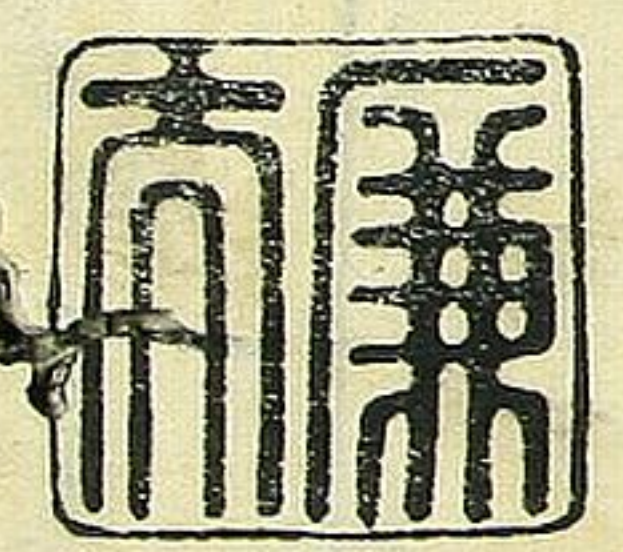
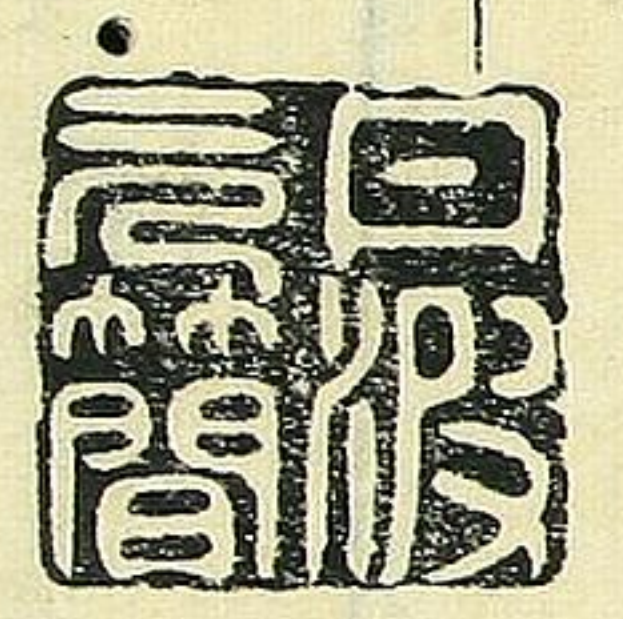
水滸原子柔遊選倉
粹極救之諸方葺丁為一
編以為戰陣之備蓋其
策嶺採單捷而可奏効

於逡巡咄嗟之間者其用心
也切矣安可無傳乎友
其大夫中山公請予言書
諸簡端

文化庚午歲中秋

前一日

丹波元簡庶夫



多紀序

五

古人の言をば事下申ゆ事
 ほとひ函場信々あきく
 痛くやせしたるひいふゆ
 力もあきくしぬ痛くは
 薬をばあきくしぬ
 弘明の事。

岩州目録

飲食

防染

毒烟

野陣

小脈

たぐひ

解毒丸

打撲

馬病

息合

大喰

蛇傷

氣絶

虫歯

岩州目次

十二

岩州目録

十一

岩州

脚氣

脚氣

骨硬

骨硬

備急圓

備急圓

力希

眩暈

舟車酔

食傷

血芻

廣東人參

虫免

やけと

防寒

瀉死

凍死

瘧死

驚死

瘧

瘧

淋

小瘡

茶湯

脱肛

疝瘡

毒刺

水あらし

魚毒

突目

救飢

七五中

目次

十三

上衝是く
或を鼻柱
痛或を心下
痞悶或ハ眼
赤痛之症
川芎 大
大黃 大
黃芩 中
薑連 中
山梔子 中
右粉薬ニヤも
煎薬ニヤも
あり

神州

十三

引風の薬

升麻 小 麻黄 大 葛根 大 芍薬 大

其子 小 紫菀 中 陳皮 中 川芎 中

白芷 小 香附子 中

右五葉咳嗽甚るれば桔梗杏仁散

かつ目

上下二法傳聞於赤雲先生

紫州

紫

事ある時の人氣ハ憊ひ立て盛壯の客氣もや
 里をんはえて大事の時小隙をていさ方を懐こ
 者ふりす一の慮とまてくき方病あると記ハ
 いうものいさやるとも矣此補らひハ更なり
 精神傷れど是ハ思慮もつひよ果るる處
 是と不志ふんをの事とふへハ飲食が腹を
 するものを用おべし未弱小兒をえん事を

生計中

四

忌て極くおすべからば古人の身配を考るに
 符けは小くそあきねそのいと用ひよと云
 いた味と食く炙腹と飾るのりよあは
 寒暑の肌と塩るほづれ夜とめち西べ
 こそしねど厭べきやうんどう云べからず又矢玉
 おうけしる音駄の肉なんどと生るるから
 橋と傾け汁酒と飲たらんはも剛強は身
 えんるねと志ある人の行ひよあらず急率の

病を食傷ふちるるものなりを征候なり
 んと用て不潔の物と食く飽のらず能煮る
 と食ふべし是れは人よ勉めらるるも食
 べつらばあまの程病といふものはあはれ
 乃はよ小情とあまのりいさるもあまのり
 中らばるねど痛者よくりく見えさる程
 徳毒と解毒とのなり野菜に塩と和せば
 食ふべからず得るるも止まるとのむべし

水を用ひけり井のありと飲べうらげ津にたるはよ
 古井あらば汲いで飲めと用ひて汲うる
 時穢物とて井中にけしきくまらに清らるる
 あり新ありとより投入く穢物とて又大と
 して汲びて大の清けりより古井に入
 卒死せりとなく見聞せり清らるる用べしと
 しと毒害あると成りたるを源に杜い水
 も毒あることおろの戒えあるひい茸物とて

野原みく清ら濁たると見ていらに由際々水
 飲て汲りぬると重たより腹痛をげし腸痛と
 痛よりおぼえ、毒の穢るるをみおけのあり止
 めると同様に夏目突えにありと桶に入てあ
 くの湯よりけりたるに清らるるす穢し津に
 するものより洗んや替たらんはゆらぐ毒ある
 べし但し之日にあたりてあたると大おわ
 けし毒せし洗んてお害はよも穢るる物と見ゆる

夏月ハ物更口に入魚うらず糞孔をうら皆食
傷ハ費するら物夏ハ食物を別て用いず
る物朽木又ハ原野に生たる各名ノ菌を食す
魚うら所凍中ハ少ハ土率五也る物を捨ひ来り
べし地ハ腐らる葉と食さざるは生機ノつこ
たるハ大毒あり戒め盡へし温氣ハ湯ハ飲べら
らば老人ノ間て飲ぶとあり

防

濕地ノ陣立時ハ必病を生ず陸取のん均守て

濕氣と不正の毒を遊ぶハ火を宜務たる物は
霖雨の時ハ不致火を禁べし湿たるるは生機を
を形びのせる事ハ諸くの用意あることあり
そあるべし凡生類のうち人ハ無靈なるハ火と
生むるを牙一の妙と云と聞り空窓園林者
榭池館廢古塔久しく不開雨ハ湧り小
入魚うら沈泥や藤引まるハハ心まうらるの毒
陰の氣人と害すらくく火を焚燭とたて

毒虫熱氣を去るべし又木を燃りたる下めて
 飲食すべし汁液や煎餅をばまると急ぐべき也
 夏は木陰を尋るものなり梢の根をきてんは
 毒く毒虫は夏に多々まは稠小畏てあつるもの
 あり是と意外の中毒ともふ古洞叢窟に雨
 霧を避んとて湯に入つらば先火を焚て後
 入べし深洞に入とあらば木の根の根をきてんは
 入らず笹の根を用べし洞窟の毒を去るべし

毒烟

りよほの古井乃毒と同愈る好原めく火
 小色ゆたさ時良く火と放ち避るべし
 とや焼拂ふべし古日本武蔵の州はよ乃疾
 創より火袋袋はひし即是なり煙袋を用を
 茶と入て刃指の葉形に結び紙べしと云々の
 書に身えたり煙をむせく死するは蘿蔔汁
 とのむせくもの汁とゆくと煙を入るは
 せせどらふ西洋めて毒を打くもの

野陣

毒瘧どくまよあこまば昏倒こんたうをとりよ是と治ぐよいあ
 瘧と解とくよ漬ひたしてその能すと目鼻めばなにぬるう入瘧いりまと
 ゆうもよはしとを又禁石きんせきと名に和わして七竅しちせうよぬる
 既すよ毒小冲どくせうよ七九竅血しちくせうけつと名と頼たのりはにそぐ
 野陣やじんせんよ大蒜たしん葱しゆのよと不ふ政せい食じきして濕氣しつせき瘧ま
 和わと過とべーつよ大蒜たしんと勝回しょうかいよもつけく持もちべー
 とまり蘇そうらああとら付つあひい腫しゆのみの
 安灸あんじゆめも用もちゆべー寒氣かんせきと患わづらびてい外ぐわい射しやハえ

水脉

ふる泄せつ下か腹痛ふくう瘧まよ再發さいはつするむれ軍ぐん
 場ば中ちゆうは毛泥けぬい凍とうと名よのあしてそのうへは瘧ま外ぐわい
 すねい下かの雜ざいと過とると形かたち又枕まくらよ築つと筒つつみと
 正ただ色いろの遠とほ水のみづのなかとあり人ひとの息いき香かととい
 和わらるといひて空虚くうこより故ゆゑよ瘧まとらうくと
 見みえたりなり 然しかし瘧まのあつたつと
 遠國えんこく小政せうせい入いく便宜べんぎによりてあると地ちと陣じん取と
 せり事ことゆらぶおに信しんよ井いと堀ほりんよハ中ちゆうぶら
 水脉すいみやく

老州

一

とこのるべし地と塘て完となし曉を色と赤
 る対小穴よ入て目取地際にあてて望みの氣あ
 て烟のぞく上る氣あく水の生る流よくと
 中し氣と望むれば地色が立のあめく見やべ
 ず地と塘ると三天廣さはふのきりなり相湯乃
 盤小池とうとく一面よりて完の中に入て二
 す地よりとためあるほせにまめくす
 うへめくしとうけ蓋ひゆさそのうへふ去と

た

おほひ一日と過て見るに盤の底よ赤氣あ
 湯と持たらんハ別ち泉なり又陶器ふちう地あ
 かり相厚めく相湯の通りあてて試むる
 もありと森西あ清といふ書に書くなり
 大軍大の動す対用意するて計ぬもの
 艾 備急湯 廣東人參 桃花露
 新病解毒丸 突岡の茶 高妙茶
 別て小解毒丸ハ万病ふちうに故た中

七古中

二十

紫
廿一

魚つら汁

解毒

萬病解毒丸 諸毒と解し 諸瘡と瘳し

骨節の不ぬらりと利し 百病と治し 死を

いじせきとめららす 功効悉く述ぶらば 凡病を
遠くいぬ 徳をとり 氣を効すは 菜をらんを
あるべしとぞ 一名紫金丹 一名玉極丹

山慈姑 二五 又倍子 日 續隨子 一五

大戟 一五 麝香 二錢

端午七夕重陽あるひは 徳月徳黄乃と名日
とみく 瘡戒盛腹と 糲ひめて 茶と茶と
よく 篩ひ 糲米のとり 湯に 和し 同小入て 糲と
介下と 一錠の 重は 一分に 九と 七病の 重なる者
めは 夜くのらひく 二三 分の 下利と する とき
く とき 後 温粥 せ 補ふ
凡一切の 飲食の 毒茶毒 瘰癧毒 疥癩の 毒
土菌 死牛馬の 肉と 食して 毒にあたり たり

廿四

廿一

小いあまき一丸と磨く腹す或は吐下して
愈癰疽背小鼓一疔腫楊梅瘡木一切の悪瘡
風疹赤遊とて赤く村くに灸とり又疔瘡に
あ或は酒めく磨くて目く数々なむるべし
陰毒湯毒乃温疫傷寒めく犯乱一喉痺喉
風ハ疔疔乃絞るけに三匕と水ふ加へ後す
心氣痛を外の積氣ハ酒めく後す
泄瀉不利霍乱絞腸痧とて痛つらく志が重く

乳ハ薄荷湯めく下し
中風中氣は眼のいろも又癩又痲鬼物とく
拍小鼓ハ或ハ拍つさ筋骨引つる痛小暖
酒めて用自造溺水鬼速とて拍小まよえこれ
死たるもの心は狂あさかあるハあめて腹す
傳尸勞瘵ハ氷めて服し惡拍虫積と下す
久遠とて小瘰癧瘰癧せんとする時ハ赤流氷に
あ桃の枝と葉一振す

頭風痛酒みきこりて支眉の上に塗る

洗腹湯鼓脹小麦芽湯少く後寸但酒少く後寸すもよく

むく歯の痛小酒をておして用也

湯火傷毒蛇魚犬一切の虫さく為小麻煮て

ぬり又服す

打撲傷損松香酒を酒小煮して用

女人徑用を記ればゆき後す
小児驚風又痢又痢落着湯をて用也

打撲

打撲らぢこ小ハ鮓肉又ハ全移とするまで酢あて

こりけくろ骨まで傷たるとよくいやす焼酎小

て洗ひ多ふふと傷をよと柳の皮あてす記とく

又生薑はふり汁又阿膠と入てせへてとるじ

ぬり又大蒜拵て泥とま一石灰と拵一壁く塊

とま一七月十二日小六中に搦て翌年此日小水

出るとするとくまて並まを洗る又葶麻蒸去紫

とも小蓮蓬にいて服す為馬の葉とて使受せり又

去蓋と来して為糊おくと記患る取にぬる

廿四
廿三
廿二
廿一
廿

馬病

馬の病も大まか人の薬にて治す効あるものなり
息令といふものハ人小もあまど人ハ兼るより
及と已と書ふが華佗する事稀之統といへ
強く死んとする時ハ人參と合むべし或ハ桂干
もよう馬此息令よりもうし寸又法と書と小
ぬき水にて解魚一切の息令乃茶ハ皆齊香
此入りのまれの解毒丸とあり磨して用也
魚一法ともく書とおく飲さむるにハとる

魚一是と妙法とす又遠馬の時營のナミ又麻
乃切ハ浸種と武治と標と去りて包と法はけ
る事あり下手にくハ兎角に馬と助る事
かくと手なれハ馬の病速ぬやうに薬をねむ
常に重枝と調煉するに去くハか

息令

息令の方

人参 一両
甘草 同
鹿角 白麝香 二葉
右細末して煉蜜して餅を耳かき一つは

廿四

廿四

此方

て此水あとも餌魚一

毒料と喰ひ馬の體て癒るる先んやと能く

洗て上味等とぬるべし 薑厚甘草香附子右

煎して四割又馬書と目念に全量好むるとしへる

るあずが候るに色あはれぬともやに死す

金縷 カナハタ 女ノホソノヲ 又ハ霜 ヒホ粉 松脂

右五ヲ等分ニ合セ爪裏ニリカ子ヲ當ル也其後

ニ水ヲサツソクニシ廿日ノ間如鐵可秘々々

馬乃血凝るるに麝香三年 法清の煎る

の汁と喰ひぬるるに上小送おつるる

たる馬あまよとつる赤馬飛まて汗を多

殺するハ強とすをこみこよ 強と搦込後

よ湯にて洗ふハまよとくよ強

天喰 諸熱の喰たるハ解毒丸一餅一餅とて病大

喰ハ小使めく病口とく洗ひ大牙は齒治

の跡らぬ極く血を好と志むる也 歳後もあ

七ノ中

十五

岩州

七

らしき物と多く毒と物牙の毒と焼く
 毒解毒丸と用由へ一茶さうき者小豆油
 あげ魚を解ふとわらう漆き毒食と一切除く
 平日とるる冷ふ時に再殺の毒か一但毒いぶ
 極めし七膿汁ゆるると身と守るやく愈るは
 ねとらう水いほをぬい熱湯あて洗或刀めく
 毒根をあげおす下一是非おらする葉と
 ぶすまのと蛇傷を紫金丹と用由へ一纏めて

はくくむすび切盛一毒氣れよふのから
 ん事と押ゆるたえあり纏る積のらと
 などの物う一纏と着して馬上せんふハ
 小教とくらされ馬のさむつさたか
 時毒木の間に茶搦とさゆる海い馬
 するなる是非と用義おけまば叶いぬる
 なり小教のらと里指の故帳の纏と登の間に
 物戸あるとと巻あげおける時のごとくす

る之ありきる時行端と引ぬきす
 下敷の密るやうふさるなりけ紐ハ何さへ
 ありとも結付て貯る魚一又大便せん上
 草摺とらるるり系馬の時のどくすべ
 増傷の妙葉ハ乾枝と酢と酢一ぬるべ一乾枝
 ハ寺院ハ何時貯るべ一ぬるる樹上ハ青樹と
 らるる塗又泥もぬりてうと維乾枝と硝を傳
 なるに若きり又は葉と花ハ小壺て大とらうら

一燒切あるは葉ハくハ炭大と酢ハ推はるも
 ら一又赤樹と丸のよハ葉ハくハ炭大と酢ハ推はるも
 又糖竹のやにをつける又葉と酢と酢一ぬるる樹上ハ青樹と
 とを分ると香して白漆と吐一白莖根とぬに摺
 けと傳るぬれハ葉ハくハ炭大と酢ハ推はるも
 小腸まる事ハ珊瑚膏と名く
 艾葉ハ多く縮ふハ一氣絶ハ神廟又その
 三寸開元輪の左右天樞ハ倍ふそからに灸すべ

人 共 中

七 十

足れ骨に糸くせり又腫拍の位糸糸寸る

と臨て糸するハ橋よりうすく切ると血為につけ糸

血血の糸ぢあ寸口中の痛ハ程更虫歯の糸ハ必饑

小喉の左右に核と結ふもの有り糸くせり糸

糸口糸壯寸毎へ一日にて結みハ翌日糸結て

寸ゆる又足れ大指乃腹よこす横紋の外よこの爲り

糸く喉痺に妙有りきち濃塊居て脚の腫たる

糸ハ日々に三雲と糸市に糸すハ十壯より二十

脚氣

壯不至るハ水あ糸に天極糸糸すハねい寝冷

ハ足腹よりとら柱目小三雲と牙程糸糸すハ

又大指おやもと合指乃骨の糸又小合指と云けつ糸あり

糸すハし虫歯糸糸す合者糸と結て虫歯と糸

流糸毒虫咬たるに糸くせり者踏抜もかみ糸

と臨て糸するハ程より踏抜たる後ハ田志のち船の

垢糸ハ入愈々次糸水みづ糸糸あ被傷風いせうふうに

糸も也被傷風糸糸たりたるも糸糸に糸すハ

踏抜

廿中

十八

踏板とんすとあせ死て草鞋の同小革と
 とみ又鼻返りする是はあに人々同いぬきを糸
 了成て用ゐる小成うへ一其綿をかぶるなりへ
 して水を拭きたる裁度も打時ひきたる草鞋
 如く成是とつゆされともふかきまじに草乃
 鼻かへし水ぬいりてあめるやと津又とも凌
 へ一足袋の程又足袋外小いけ綿をひく製
 寸へ一付外多き此程方あらんやまとも重く

骨硬

此等て歩行不便なりあまゝ死候とあるへ
 其綿の用意は常小具足と其綿より包並べ
 手候不持行ハ寒氣注と死肌又満ちひく
 滑くあり陣中ハ衣服も多く推りかゝ死
 候あり外糸と注が建疝積ふとも凌度
 又鼻骨喉ふたらへる時小飲との水成程に
 丸して飲へ一鼻骨綿ふつとてかゝる虫と避
 むとて具足箱乃内小捺腦を入るる法なり

喉の受法へも棒腦の氣といひるせし
 既上熱痒し甚しき昏眩す其端おとふ
 を氣あると身にまこひての煩悶する必疑ふ
 るかうれ試たさるるかきたふ汗膏して
 大不働く時へ逆上して眩するそのおと

ぬき

或清泡おわたりて玉ぬく外科を枝と見せ
 とも玉ぬ出さるる痛に苦む心戸本町目仲村
 伊志清とりよその神如教ととげ抜の買茶

あつ酒おと用るに玉すとやうふ出て平後すけ
 茶の掃地お利お茶油のみのおとと去用の中り
 来ての熱痒めして洒れて腹す是則神如教あり
 とそ度く試るに奇蹟あり真骨乃痛ふなら
 たるはをるる満のとげ抜るり又芭蕉の紫の
 黒焼ありとそりふ是の末法お熱乃抜る記
 めもろし又芭蕉の根と生ふく堀おさる水
 小く煮く二三番つたて用おれぬ殿熱と解す

用て下次

巴豆 去皮 大英 乾薑 各等分

右細末之、里合せ糊丸して常不燥中に
煎じ貯ふへし亦馬乃たるしつ法に用て
奇驗あり一度小二回分と用也馬小ハ七分も
用る事ありし人の食傷かす此ハ二分
許ありて宜し

金瘡

金及傷ハ外科不ありされハ治療ありかされ

と云ふより醫の来らんまで待たせし時を
あらしむ爰に神妙乃法と傳へぬす此ハ小
乾血ありし後日小膿と催して治せざるもの
燒酒小湯と煮に之洗ふ燒酎をハ此ハ酒も
用也史もかくハ人尿と用也下洗て後、雞卵の
白みと温純乃粉と和して拌せ結々搗合之
極不傷ると膏茶の如く之疔口と合くと是と
之於疔口いりふもさる事なり極妙也亦

刀帯の端と切て用由へー金襴の人の嘆息

笑大言芳力妄想契物飲酒酸鹹と極おぼすは

昔より水と忍といへとも世人の心得るやどめ

審ハ形一おきとも湯は用由へーは髪川流みて

ハ出聲するとも海の水ふて血は茶と用由力帯

と来路一幅と志を記し教乃らひろさるとたま

ふ燃れぬに通して胸と引あけ垂て去ると志

じり色は老具の秘法と守りしを記し若くとも茶摺拵

五帝

て見苦なるのたくと且い忍れもよく久ぬ懐くとも

重と不覚陣中一ハ布を端ハ貯もたじゆく

登記する形ととも此帯もうハ帯も入用はまより

長くしてかる耐かと端と切てきふとと心をの

つと守又白布あてハ血泣かると染たる耐見えや

すたあに紺色に染る事お趣又甲冑の家持

ハ用立てる久ハ隙見をく歌の縁らひおかれハ

を心得るを良と守せのハ里力帯と不詳人の

燈火ハ小教のく月るきにらるりかと仕付たる製
 あましとも悪悪きもの也俗不脈不と切き函と
 云々あり予腰肉の小疵あて卒死せるハ教人見
 たる小疔かあは清うらとに製するきなり

眩暈

着鼻して働とれた氣逆とて眩するもの之お小
 塊の眉ひさしはふく極ハ全眼と不好赤爛かどに
 するハ眩せし時の換るまあり又見切小と夕照
 射暈かといわれた也如斯時用るにハ辰砂益

元教りんせん 一と一里至方 滑石くわくせき 甘草かんさう 辰砂ちんさ 右一赤

右細末して水服すと見ゆきと是ハ三黄湯といふ
 其の程更ゆきより三黄湯方 黄芩わうじん 大黃連たいわうれん 中

大黃たいわう 小に七教服するもはしぬり出て用
 此程を治し人全瘡血暈遠熱程孔或吐血眼目赤

痛風眼目痛法卒病卒後或小便驚風婦人血行
 道不用てより煎投するハ本法也婦人血道孔ハ小

為不用るありて扁鹊の大瘡湯と云ハ此薬と云

毒醉

説のあるハ其驗の果ある故の法法ある後を覚ゆ
 亦お色驚録ぬ色醉たるに用て者又亦お解ぬ
 るハ蕃椒と困辛味と名知おの辛乃是いつる
 中て用ゆれ醒かり亦お疎むとす人ハ穉者
 と解中おはめくよう
舟車お解と醫書
 注舟車痛と見ゆ

食傷

食傷けける時備急圓かくハをやく煙州と蒜ト
 飲下吐する也又腹肚と洗下痛去て入る
 る速あり又吐せむとて吐するとあさつはハ吐と

血留

湯おたそゆるくとして飲時吐するもく吏
 あくも吐せぬハ香翅を喉お入る擦る下

桃杞散 合陰吐血 衄血 下血 一切乃ちと免

茯苓 葛粉 朱砂 加くと桃色に

する上にあの甘て同と因て氣と志つむる時ハ
 立取お當る也又血當お煙州と條又艾も條お
 鏡面茶 天名精 希蘇の葉何れも揉て付け
 山吹花もつける大蒜と衄血の祓らにする又蘇

眼とやぶり開かす丸三つあてと丸一丸とかきとめろ
てつけるとあ

赤白痢赤痢一丸飯のころを湯少く用也

蛇傷トヤアキ虎傷トヤアキ酒少く一丸を用功解トヤアキかきとめろ也

蓋毒トヤアキに逢んと思ふ時先一丸を膝す毒トヤアキに遇て

と返にあり

喉風トヤアキ喉痺トヤアキ一丸湯少く用也

心氣トヤアキ疼痛トヤアキ一丸見合トヤアキに粉トヤアキして温酒トヤアキ少く

用也又嚼トヤアキて酒少く下トヤアキはきよ

五名トヤアキ如腫毒トヤアキ或ハ癰疽トヤアキ等の疾トヤアキ名山トヤアキ一丸細小

して塗トヤアキる又醋トヤアキ少くみかきと加トヤアキく用也

小血トヤアキ小口物湯トヤアキ少くみかきと加トヤアキく用也

杖傷トヤアキ或ハ及傷トヤアキの癰血トヤアキに紙トヤアキの太トヤアキく嚼トヤアキて傷トヤアキる

又杖トヤアキと行トヤアキとんとする時トヤアキ先一丸と膝トヤアキ其血トヤアキ其不

里心トヤアキ不衝トヤアキ守杖トヤアキ後トヤアキハ志トヤアキとく用也

婦人赤白帯下トヤアキ一丸研温酒少く用也
婦人赤白帯下トヤアキ一丸研温酒少く用也
婦人赤白帯下トヤアキ一丸研温酒少く用也
婦人赤白帯下トヤアキ一丸研温酒少く用也
婦人赤白帯下トヤアキ一丸研温酒少く用也
婦人赤白帯下トヤアキ一丸研温酒少く用也
婦人赤白帯下トヤアキ一丸研温酒少く用也
婦人赤白帯下トヤアキ一丸研温酒少く用也
婦人赤白帯下トヤアキ一丸研温酒少く用也
婦人赤白帯下トヤアキ一丸研温酒少く用也

まめ

豆乳にて乳をむじに糠汁の噴け飯乃を煮下
 へ後る馬糞煮おもろく又豆乳を煮お生する
 半夏の根とくだら傳る又豆乳出る紙障ハ着
 椒もすり津くる又艾葉と煮もろく草刈て
 柴以炭ぐらたお湯と豆乳おもみ傳ア
 湯火傳水お入るるおくれ流しうけるハろく煮
 中へのろく又おはらるるろく
煮ハ毒と結絆討りのあり
 含毒あり用の菌の毒り
 煮合おろく用ておありおけかきと名かすにこそ用むかこ

おん

又杉の葉黒焼おして茨お和く傳又石膏
 粉おして胡麻の油お和く傳飯と黒焼おして
 油お和く傳る又胡瓜細お搗てぬる亦人家此
 古腐トガの下水と煮てつける又湯中お煮灰と
 入るるろく水に煮く又馬糞と水お煮た
 つあるおてやけどハ急お治する時ハ引へりて
 悪く故お油おそむるむるれ手當あり玉子
 の白みま煮栢の粉をおしてつける亦砂糖も

よくことの外いよく付はやく
 大痲おほきまの殺ころして内攻うちこうするものあり三黄湯さんわうとう
 とをら由よし魚いしく膳のう汁じゅうにおろ孫まごを死しする者もの
 多おほく露あらし蜂はち房ぼうくらや死しあしてあふらに
 解と傳つる
 手て不ふ龜かめ方かた搖ゆのあふく想そう身みへぬか魚いしく
 又また酒さけ三さん升しやう胡椒こせう拾しやく貳にかぶく奠せんトて手て足あしり
 ぬか魚いしく

溺死

溺おぼ死し不ふ攀はん石せきと粉こなりして志こころを重おもくは鼻はな不ふ吹ふ入い水みづと吐は
 すかりむく大津おほつめく溺おぼ水みづと救すくふ不ふ俄いつぱ不明ふみょう攀はん石せきか
 去い醫いかして死者しやうあく紺屋こんやへ糸いとをけるに忽たちまち不ふ得えて
 救すくたると愛あいせしとと厚あつくり難たが冠かん血けつ又また象ぞう牙げの
 粉こな何いを鼻はな口くちより吹ふ入いる肛こう門もんより血ちの出いたる者もの
 足あしの大おほ指ゆび強つよ直ちやくありぬる不ふ治ちやくと守まも山やま藿くわく炭たん胸むね不ふ
 ても羽うのまゝ黒くろ焼やきうして想そう身みへぬる溺おぼ死し一ひと宿しゆくと
 魚いしも尚なほ救すくふべく皂さい角かくと搗つ緒おに包つつみ肛こう門もんへ入いる

又死人の両足と肩にうけ死人を背お載て擔ひ
起る吐水と活寸又壁と打ぬく下に死人を
仰お針うめを宗壁と露ふは眼お去のう
ぬ扱ふすう自然水出へ一息をのちたえ
たるも此法を用むく活ぬいふく救はふと
寤むへ一又砂と炒て死人を覆ひ面と下おも著
ては鼻と出く砂をええ又かへへ一又酢を鼻と
く鼻中に挿く脈と灸するう百壯

紫

三

細血出次時小糸筋と一本横お合ませ水うり
出すへ管を以て右耳と吹す夏末と鼻中に
吹入る皂角末と穀道中吹り夏月あつハ
溺人の腹と横お牛乳背お灸く牽て強く切
老しぬ腹中水自然お口中よりもあふびふ
大便うりも流出おび生姜湯おく蕪膏丸成
瀉さ感ハ生姜湯中色おく但糸時おたおる
人をも授押しむも牛ふく人の背おとり

牛

四

裁て牛乳あめむやと糸動と色り冬月あうハ
 急小温くも夜と去り流と柳布袋糸色と胸
 の内と慰し厚く皮抱しと寛此肉の灰と灰
 多皮抱乃と小補て漏人と去ると小覆外せしめ
 小綿の枕ととさみ又厚く灰をかけとさうり
 絞縛を加不灰此眼目小縫せさうん指ふするあり
 口と開て横小筋と合せ蘇香圓と生姜湯ふて
 困ひ管とい耳鼻肛門と吹等ゆるうハ夏月の

梨死

通ふすう冬天ハ醒ぬる後温酒とが飲しめ
 夏もハハ少粥と飲しむ按するに灰性暖めて能
 水と接塩の漏れ死たるもの灰とい埋むさハ灰
 みて即活寸此時驗るり 蘇香圓とあれどは
 解毒丸あり
 凍記を足強歯とらむめたるうハとを敷
 氣ある者ハ大稠めて灰とめて暖ふ成たる時
 袋ふくくんとと慰し冷たうんハ又換へ一月と
 周と候て温酒及び粥とあくとあふハ一若志上と

あまめはくし七早く大に色付る時ハ改竊也
中氣と争ひく石死と通る月漏水しと衣履
も凍りおも人事好くとも但骨不微温あらえ
極ふるすあましとく微笑する姿あらし早く
まは鼻と挿ふしと笑ひく所いものま極ふる
あまし又俄小あらし大に迎くつら大を
見る時を大笑して救ふ危りらに
凍死既小救済たる時を生養皮とも挿くた死

世補

四二

厭死

凍皮こまかしく水三盞一盃に煮し温服す
厭死睡中に忽死して死する也皆中惡とす
誰の地の心と以男子いた女老木の鼻の肉不利
入る事六七寸おねも同く血出る時ハ即しみ入
る又上唇内小粟素粒やらの出来物あらし汁
破るし又上唇と綿おあめして鼻中おまわり
そあまをと攪り驚かむる事かみれ赤脈津に
灸するし百壯鼻中お皂角菜と吹く感ハ

世補

四二

菴の汁と身中に灌へ又生膏痛と研汁と次
て一盞と灌へよ

驚死

驚怖して死たるは温酒一盞と灌く撲おして
解死たる及又酒こり小心以温酒を三日と
ぬるも亦救得たるもあり先死人と懸屋へ
老人の死人の髪と挫た半夏末と竹筒ろ或ハ
紙筒筆此管少く鼻中に吹へ一幸不汚する
時を生薑自然汁と飲すへ半夏末此毒代

治すといへり

按ふ半夏末と微乾此毒入り半夏末ハ
自南末と同法あり然るに半夏末此毒と解す

此の毒と六塵懸磁懸磁の治法半夏末と末一を用由生膏
自然汁と洗滌と搗たらかけ汁と水水と用むざるの是
あり此と洗滌と洗するあり此を此と此と懸書に
あり懸と云ひ此を懸懸と加へて此と此と
擣懸ハ物ふと云はる事此擣懸とは此と此と

陣中にハ腹痛と脚氣腫満と流りする故ハ此毒
懸るるる陣中にかさるは士卒此毒ありと云
懸るるる見あすへ此部下此士卒と云はるるハ
古の良將のつとめたるおまへ人心と得るる

人勝利をたぐる世に此使藉不登むへく藥會と
 りふと下と形くおの物も分ちあふへく共よ骨
 骨と同一くすと身物といひあり異子と
 卒の腫物と吸て膿ととらうへ子あり度く
 結と吸ひ腐肉と移る樹を至てまやく治する
 事膏葉より毛速形里人の死力と居ゆ
 めんへ解ふ厚くつらうおふを別しへく痛試
 痛むへきあり癰の妙薬は田螺と蕎麥粉と

癰

と行ませ腫物れ果へつ時く取かゆ後ハ腐肉
 を度くに去あり

癰

濕氣おあるに癰の發する事ありハ癰の形
 におもかるく形ういあるに指の股よりけり血と
 へへ針もすくハ小刀の尖めく皮と密切か
 紙めく拭知ぶハ糸及びかすう血物とをさる也
 右右めくハ両あねと是とハ團といふまゝ脊お
 大椎とそえのと付すまハ大骨ありやうはの

裁木硫黄等分 胡椒油少 俵二日 かせし
 治す ちりねと 必 卑 俵 菜 忌 又 肉 攻 志 たらんと
 免 たら 愈 言 應 子 備 急 圓 と す り 俵 合 出 出 出
 と 奉 む 一

藥湯

入湯の方 荆芥 防风 薄荷 各三十分

生松葉 生苧麻 各二百分 臣 一合 奉

右大綱 少 二 湯 まで 煮 して 七日 入 ち 小 湯
 の 元 確 実 子 女 本 湯 代 入 合 して 大 じ 付 了

藥方

晚肛の方 靈天蓋細末 して 油 ぬ ぐ 塗 了

又方 石胡荽 ちりね つけ ち 藜 苳 此 葉 菜 と の 不

せん 洗 ぶ 煙 州 の ち り ね ち 不 化 寸 懸 膽 と 此

津 ち り 角 と つ け ち 牛 糞 と 焼 て あ ち ぬ 了

藥方

麻瘡 煮 漆 の 桐 油 合 煎 此 紙 ぬ ぐ ち り ぬ 了

藜苳の葉と 大 ち ぬ 包 ち ぬ 了

藜菜 此 根 と 此 葉 ち ぬ 了

藥方

海鷄 眞 の 針 ち ぬ 了 ち ぬ 了 ち ぬ 了

こゝろ

此哈たる後血不山ハ蒙此居黒くやけた
ると候一後不痒あるハ癩不感有り
乃やにを候

強弱

水あさ重合傷不用ハ并不思温と辨る不換
金正氣散モいふと醫者も是て飲一
煎をくハ我見一七調合せり
分量と記す道中用んれり

十 蒼朮 四分 陣皮 三分 藿香 五分 小豆 四分

厚朴 三分 甘草 少 生薑 二片

右水一盞申入一盞不賣用由 木香 一分 乾薑 三分

黃連 一分 と加へる 食傷霍乱吐逆のつゝ記用之

大黃 三分 と加へる 水はるもよ 兼合す

河豚不醉たるハ胡麻の油を生に多く飲て吐

するところ 守備急用と用るハ

小醉たるハ棧の茶せん一用也又大根の絞汁と

藥

紫州 四一七

飲犀角或ハ一角を用ゐる元とあり類での會傷
小解毒丸を用侍急丸と用ゐるハ猶更と録しき
既小記す

突目

突目乃茶 馬坊つさぬお色より

龍胤

去腸て紅花を服
小入る黒糖一匁

明礬石

あふわとを加へる
定さるる

反鼻

黒糖より一匁

右突目小乳おくらう入眼病より血の出るも
為る乳のお記付の只さうとすべきか

救飢

飢人と母多、食と與ふるに先赤去とあふ加たせ
半搗りと飲せ後お食とあたふべし赤去と加さる
あつむる時ハ清らふあふり去搗水といふ又厚朴
とせんしと一搗りと飲するもより此二法とせんお
壺に合せしむる時ハ急お死するもの也
吾人の郷小粒と遊る時ハ白茅根を洗ひ淨し細
おて或ハ石上に晒し乾搗き粉おして水より
を飲と服す是ハ辟穀不穢と身おけおま方多

七〇中

四一八

といつとも急きゆう不お行あひがたふ記しするまとをま煖ぬく

又また赤あか小こ豆まめ一ひと升しやう大おほ豆まめ一ひと升しやう炒ありつ搗つき粉こなをいてい合あを

新あらた水みづ少すくくく膳ぜん守しゆ目め系けい三さん升しやうとと圍いひませせ半はん一いつ

日ひとと過すてて不ふ飢けい又また説せつ小こ豆まめととららんん津しん濃のう小こ使しり

去さてて人ひとととしし七しち虚きよ艘そうせせくくむむとと云いふ

竹たけ中ちゆう半はん三さん升しやう湯たう飢けいとと救きう方ほう

松まつのの木き此こゝああ満まんたた日ひふふ干かん細さい末まつをを行いふ

人ひと参さん一ひと支し白はく米まいぬぬ合あひ

右みぎ三さん種しゆ粉こなおおくく七しち升しやう記き不ふとと小こ丸まる一ひと蒸せい籠ろうをを行いふ

むむくく是こゝとと軍ぐん兵へい十じゆ五ご人にん小こ配はい分ぶんをを行いふに三さん日にちつつ

右みぎ三さん種しゆ粉こなののあり

味あじ喝かくとと膳ぜん中ちゆう小こ使しりあるる、あととききののええ包つをを行いふ

津しんとと小こ次じ不ふ味あじ愛あいせせ以も又また舟ふね小こ醉さいるる時ときはは本ほん

紫むらさををけけ小こ煮ゆてて合あひひ三さん升しやうハハ枝えだとと云いふ作つくりり分ぶん三さん升しやう

辟はく穀こく軍ぐん中ちゆう第だい一いつのの方ほう

白はく朮じゆく一ひと升しやう南なん天てん楊やう子し

世

四一

氷砂糖 有本行

右蕎麥粉の強りて桃実の火の如丸くして
 日ふ一枚を暖す是ハ不能戦湯亦條七嚼碎
 水おと服す好ハ氣不食飯食せんと欲す時
 ハ煙湯と以て解以先君子乃傳る方あるが
 故おらに記す

砒霜石の毒おあつる時ハ砒石ニ支と水より
 和して用也屬

原子柔示此一小冊
 子。檢閱一過還之。子
 柔貽厥孫謀之意厚
 矣。世人鑑函中宜具
 之書也。刻成之後請

世一跋

五十

惠我一本

文化元年甲子冬

翠軒老人題

鶴見弘書

南陽原先生著述既刻目錄

瘕狗傷考 一卷 業桂偶記 二卷

經元彙解 八卷 業桂亭醫事小言 七卷

砦州 一卷

安政三丙辰歲初夏再々校

江戸淺草茅町三丁目

書林

水戸本町三丁目

須原屋伊 須原屋安次郎

